

## 代表幹事就任にあたって

名古屋市立大学  
徳留信寛



さる7月15日の第25回がん疫学研究会学術集会開催時の幹事会において、図らずも本会の代表幹事に選出されました。歴代代表幹事の先生方のリーダーシップを拝見しており、身の引き締まる思いがします。ここに学術集会のあり方、若手研究者育成のこと、個人情報保護法に関すること、がん疫学研究雑感などを述べ、代表幹事就任にあたってのご挨拶に代えさせていただきます。

1992年に発足した疫学会発展のために、本学術集会は翌年の第16回から今回まで、発会当初のシンポジウム・ワークショップ形式に戻って開催されてきました。一般演題の発表がないため出張費が出せず、若手研究者が学術集会へ参加できない状況にあります。その理由だけではないでしょうが、最近、若手研究者の入会が少なく、会員数が約260名で横ばいです。疫学会が十二分に自立した現在、“疫学会振興のために”という名目はなくなりました。そこで本会活性化の一環として、一般演題を募集し、若手研究者の発表の場を設けたいと考えます。

第22回学術集会(1999年)から4回ほど、本会の約18%(8月7日現在47名)が共通会員であるがん予防研究会(会員数約330名)と合同で学術集会を開催し、お互いに学び、刺激を受けています。また、本会のほぼ17%(44名)が共通会員であるがん分子疫学研究会(会員数約160名)があります。それぞれ特徴がありますが、“がん予防”という目標を共有しますので、時には3研究会連合学術集会(ちなみに、全共通会員は21名です)を開催しては如何でしょうか。

ご存知のとおり、8月5日から住民基本台帳ネットワークが稼働されました。本来、個人情報保護法で裏付けされるべきでしたが、さきの通常国会では成立せず、今秋の臨時国会で継続審議の予定です。総務省は個人情報の漏洩、プライバシーの侵害がな

いようセキュリティ整備に万全を期していただきたい。そのうえでの提案ですが、戸籍制度の目的外使用と同様の厳しい制限のもと、IDに関する4基本項目に限ったうえで、フォローアップへの活用も可能ではないかと考えます。なお、研究者は、6月17日に文科省・厚生省から通知された「疫学研究に関する倫理指針」に準拠して、研究を企画しなければなりません。

ひとの遺伝子が解明されたポストゲノムさらにポストシーケンスを迎え、テーラーメイドの診断・治療だけでなく、エビデンスに基づいた的確な予防が可能となるでしょう。しかし、宿主要因はがん発生病機構の解明上非常に興味深いものの、多くの宿主要因の変容は不可能です。したがって、がん予防の実践のためには、宿主要因と環境要因の相互作用の検討、環境要因へのインターベンション(リスク要因の回避、予防要因の摂取)が重要だと考えられます。

私は本会発足当初からの会員ですが、まだまだ“学難成”です。今後、幹事の先生方、会員の皆様のご意見を伺いつつ、微力ではありますが、本会の発展に努力したいと存じます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 代表幹事としての二年間を振り返って 愛知県がんセンター研究所、疫学・予防部 田島和雄

代表幹事としての役割を二年の間に十分果たしたという実感のないことを自省しながら新代表幹事の徳留信寛幹事(名古屋市立大学公衆衛生学教授)にバトンを託すことになった。今の私には代表幹事としての過去を振り返る余裕はありませんが、日本がん疫学研究会が若い疫学研究者を中心に少しでも前向きに進展していくことを願いつつ、私の気になるがんの疫学研究領域の諸問題に絡めて三点の希望を上げておきたいと思います。

第一に、がん研究における疫学と他領域の距離を縮める努力を希望する。日本には英米国に匹敵する公衆衛生学校がなく、系統的な疫学教育が欠落しているため、他領域の研究者が科学としての疫学を認識する機会が乏しいことは否めない。日本の疫学研

究の牽引役を務めてきたほとんどの研究者は英米国の公衆衛生学校で勉強してきた。そのような日本の環境下で、疫学の専門用語に曝される機会も少ない他領域の研究者と疫学研究者が相互に情報交換を図ることは容易でない。幸いにも平成12年度からは文部科学省科研費による「がんの疫学研究領域」が総合がんの中に設立され、他領域のがん研究者に疫学研究の内容を伝達する機会が与えられたので、その問題も随分改善されてきた。さらに、分子疫学研究は疫学研究者と他領域の研究者との距離を埋めるブリッジとしての役割も果たしてきた。これからの疫学研究者は従来の正統的な疫学研究の方法論を研鑽すると同時に、基礎研究者や臨床研究者らと積極的にコミュニケーションを取りながら彼らの研究内容を学び、彼らと共同研究の輪を広げていけば疫学研究の将来も明るくなる。

第二に、ヒト集団を相手にする疫学研究者は人間としてのバランス感覚を会得してほしい。疫学研究の目指す究極の目標である予防の本質は人間が環境と心地よく交響する知恵を探ることに他ならない。毎日の不備な生活習慣をあらためることが予防行動ではあるが、日本民族が米国民のように極少量塩分で食生活を営めば日本の食文化は著しく損なわれる。塩の過剰摂取は胃がんの要因であるが目くじらを立てて塩を攻撃することも賢明とは思わない。疫学研究の成果は他人の生き様に影響を与えるので（そのような研究成果を上げるのが疫学研究者の夢）、一般国民に研究成果を翻訳する研究者のバランス感覚も不可欠である。疫学研究者は自然科学に止まらず、社会科学にも関心を持ち、西洋文化や日本文化だけでなく多民族の文化に興味を抱き、近代文明のみならず古代文明からも何かを学ぶ謙虚な姿勢が必要と思う。インドで「谷の中の蛙」という諺があるが、「視野狭窄に気をつけろ」という哲学は万国に共通である。視野狭窄に陥ると思わぬ落とし穴にはまり込み、本人も気づかずに深みに陥っていく。若くて頭の柔らかい疫学研究者には広い教養を身につけながら疫学研究に邁進してほしい。

第三に、ヒトがんの予防を目指す疫学研究に大きな誇りを持ってほしい。疫学も科学の一端を担う研究分野としてゲノム疫学を避けて通ることはできないが、がんの流行と戦う疫学研究の究極的課題は、人間を取り巻く自然・社会環境と共存していくための知恵を示唆することであり、それはヒトゲノムの域をはるかに越えた疫学研究の悠久の哲学である。

それでも分子疫学研究が重要なのは、環境要因の影響を科学的に説明する大きなツールになり、人間は常に知恵を追い求めているからこそ、「喫煙習慣は肺がんの危険要因だから禁煙しなさい」という説明では物足りないのである。喫煙者の1～2割が肺がんにかかる危険確率よりも、その選ばれる理由を知りたいのであり、それが少しでも明らかになれば従来の禁煙指導を強化する武器になる。分子疫学研究の意義は環境要因の重みをさらに明快に世に示すことであり、そのためにも日本で大規模な息の長い分子疫学コーホートを若い疫学研究者が中心になって立ち上げていくことを切望しており、その支援努力は惜しまない。

最後に、増加の動向が十年、二十年も遅れているアジア太平洋地域のがん予防に対して、日本の疫学研究者はもっと注目してほしい。国際対がん連合(UICC)も今年度から戦略を変え、開発途上国のがん予防対策に力を入れようとしている。今こそ、日本の疫学研究者が足下のアジア太平洋地域で本来の力を発揮すべき時がきたので、若い疫学研究者諸君は、開発途上国に目を向けた国際がん研究機関(IARC)やUICCの活動に対してもっと積極的に参加していただきたい。私は疫学研究を始めた二十数年前から、疫学研究者は常に遠近両用のフィールドを設定し、両地域における作業仮説、研究方法論、研究成果などを比較しながら、両者をバランスよく評価していくのが疫学研究の理想像であると信じてきた。遠い大西洋文化の行方を横目に流しながら、近くのアジア太平洋文化圏で多民族といっしょに思考しているうちに、各自の人間としてのユニーク性を認識できる疫学研究に接する機会を得るものと信じている。各自の研究生活には山もあり谷もあるが、忍耐と継続は疫学研究の不屈の力となることを肝に銘じてほしい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 和歌山県立医科大学公衆衛生学教室 に赴任して

和歌山県立医科大学公衆衛生学教室  
竹下達也

本年6月より、橋本勉教授の後任として、和歌山県立医科大学公衆衛生学教室に赴任いたしました。この教室は、昭和49年に岩田弘敏先生が初代の公衆衛生学教室の教授として着任され（それ以前は衛

生学公衆衛生学教室)、振動障害をはじめとして幅広く健康問題の調査研究が行われました。その後昭和60年より橋本勉教授が着任され、和歌山県内の地域コホートにおける循環器疾患や骨粗鬆症などの発症要因の研究に取り組んで来られました。お隣の衛生学教室は、宮下和久教授のご指導の下、騒音・振動等の環境要因の健康影響の研究に取り組んでおられます。

大学における社会医学の教育に関しては、伝統的に衛生学教室と公衆衛生学教室とが、密に連絡をとりあい、4年生の講義・実習を行っています。また3年生の終わりの2か月間は基礎配属として各教室に4～5名の学生が来て、社会医学・予防医学の中の特定の研究テーマについての調査研究に取り組んでいます。

昨年5月の朝日新聞で読んだ記事ですが、富永先生がパネリストの1人を務められた「21世紀のがん予防シンポジウム」の中で、グリーンワルド先生が、日本の大学の医学部では、予防に重点を置いた教育がなされているのか、と問いかけておられたのを鮮明に記憶しています。医学生の大半は臨床家を目指しているわけですが、臨床医学の中にこそ、予防医学的視点が重要であることを教育の中で実感することを大きな目標にしたいと思います。

私はこれまで健康行動（とくに飲酒行動）を規定する遺伝素因と健康度との関連性および、がんの発生に関わる遺伝・環境要因の疫学的研究に取り組んで参りましたが、和歌山においても引き続きこのような研究を行っていきたくと考えています。ALDH2 遺伝子の変異型の方は、アセトアルデヒドの多種多様な薬理作用のために、お酒と付き合いにくい上で様々な難しさを抱えています。私は自分自身が変異型という利点を生かして、これまで研究デザインを組み立てることができましたし、今後もこのような利点を生かして、この東洋人特有の問題に取り組むしたいと思います。また、喫煙を含め生活環境に関わる、他の重要な遺伝素因にもテーマを広げて生きたいと考えております。

和歌山県における、がんに関する疫学データは今の所決して多いとは言えません。厚生労働省のホームページからH7年の死因別年齢調整死亡率をみると、全国平均にくらべて、悪性新生物、脳梗塞、心疾患などが全国平均を上回っています。悪性新生物の中では、とくに肝臓がん、膵臓がん、肺がんが、全国平均を上回っています。肝臓がんについては、

西日本の他の地域と同様にHCV感染の寄与の大きいことが考えられます。また肺がんについては、喫煙率の高いことが考えられます。実際、H8年の県民栄養調査において、20～89歳の男性で63.5%の喫煙率で、全国の55%程度という数字にくらべて高い数値になっています。和歌山県では、最近全国に先駆けて公立学校における全面禁煙化が実施されて注目されています。このような取り組みが、和歌山県における今後のがん予防活動の活性化につながることを大いに期待したいと思います。

がん以外では、糖尿病や心筋梗塞の年齢調整死亡率が全国にくらべて高いことも、重要な課題となっています。資料によっては、BMIが30以上の肥満者の割合が和歌山県は高いという示唆もあります（健康日本21の普及と評価のための市町村支援マニュアル, 2001）が、まだデータが十分ではありません。

和歌山県は、死亡率でみる限り、とくに男性は健康度のあまり高くないグループに入っており、今後のヘルスプロモーションが非常に重要な課題となっています。現在、健康日本21との関連で、保健所によっては、地域住民を対象とした健康調査が行われつつあり、基礎資料をもとにしたヘルスプロモーションに期待がかかります。最近開催された、健康日本21の市町村版策定を支援する会議では、いくつかの市町村より、積極的かつユニークな健康づくりの取り組みが報告され、大変頼もしく感じました。

和歌山県はまた、都市部、山間部、海岸部など、特色ある地域構成となっており、地域ごとの疫学的特性の把握も大変興味深いテーマです。NEWS CASTの5月号に森先生が十勝地区について書いておられたような、ネットワークを活用した生活習慣病の登録システムが実現できれば、二次医療圏ごとの特性の把握が可能になり、すばらしいことだと思います。聞くところでは、すでに医療ネットワークというインフラは和歌山県でもかなり整備されているようです。NEWS CASTで再三論じられている個人情報保護の問題や、いかにして地域の人々の理解と協力を得るかという問題と向かい合いながら、また臨床の先生方のご協力を得ながら、フィールドワークを進めていきたくと考えております。経験豊富な本研究会の諸先生方のご指導を仰ぎながら仕事を生きたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

## 日米がん研究協力事業による米国派遣 愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 嶽崎俊郎

平成14年6月10日より同23日の2週間、日本学術振興会の日米がん研究協力事業の一環として、米国ボストンの Harvard School of Public Health (HSPH) とニューヨークの American Health Foundation (AHF) を訪問したのでその概要を紹介する。

同事業はがん研究の国際協力を推進するため、米国 NCI との研究協力に関する協定に基づき、共同セミナーや米国への派遣研究者に対し補助を行っている。対象は基礎研究、基礎科学、疫学の3領域、派遣採用数は約20名、要件として派遣期間が2週間～3か月以内となっており、前年度の9月に申請が行われる。

私は1993年より携わっている日米共同の肺がん疫学研究と1996年より携わっている日中共同の消化管がん比較疫学研究に関する情報収集と研究打ち合わせを行う目的で、「国際共同研究のデザインと解析に関する検討：日米の肺がんと日中の消化管がん疫学研究に関して」という課題名で応募し、派遣される機会を得た。

日本は男の喫煙率が米国より高いにも関わらず、肺がんの死亡率は米国の3分の2以下と低い。その理由を検索するため、私達は AHF と共同で共通質問票を用いた肺がんのリスク要因に関する比較疫学研究を行っている。これまでに喫煙習慣に関する解析を行い、日米で共通する、もしくは特異的な要因を明らかにした。さらに日本人特有の食生活習慣のうち、魚の頻回摂取が肺がんに予防的に働いていることを見いだした。この知見や解析の方法論に関して、HSPH を訪問し、栄養疫学研究の専門家である Willett 教授、Stampfer 教授、Giovannucci 助教授らと意見交換を行った。同教授らは作業仮説や結果に興味を示し、HSPH のコーホートデータを用いて追試を行い、その結果を連絡してくれることになった。また、AHF でも同様の内容を Weisburger 博士らにセミナーで紹介した。同博士は地理病理学の概念を紹介し、私達との共同研究も含め、地域比較の重要性を強調した。また、NSAIDs による大腸がん抑制効果を研究している Reddy 博士らのグループとも活発な意見交換を行った。さらに、共同研究者である Stellman 博士と今後の解析方法について詳細な打ち合わせを行うことができた。また、今回の訪問により両国の質問票の作成と評価法に関する違いが明らかになり、今後の課題と必要な作業が明確となったこと

は有意義であった。

中国で進行中の半定量食物摂取頻度調査票 (SQFFQ) 開発に関して、食事調査の解析方法、SQFFQ の開発方法、妥当性の評価方法について、HSPH の Willett 教授に私達の研究内容を紹介し、意見交換を行った。特に都市部と農村部をカバーする SQFFQ 開発に関して、それぞれの地区をカバーする SQFFQ を2つ作成し、いずれかで選ばれた食物をすべて加えれば、この SQFFQ は両地区の食物摂取をカバーするというコメントが得られた。この意見は今回の訪問で是非、確かめたかった点であり、現行の方法が妥当であることが確認できた。また、Harvard Center for Cancer Prevention の Hunter 教授にも同研究内容を紹介した。同教授は複数の国におけるコーホート研究をまとめて解析する国際共同研究を行っている。国際比較研究を行うには総カロリー摂取等の背景要因の調整が重要であり、そのためには一般住民の生活習慣情報を十分に調査しておくことが必要であるとのコメントを得た。これは今後、中国3地域および日中韓の3か国の研究結果をまとめる上で貴重な情報である。

今回の HSPH 訪問の受入先になって頂いた Mueller 教授には成人T細胞白血病ウイルス (HTLV-I) の母子感染予防に関する介入の研究結果をセミナーで紹介した。同教授は宮崎で HTLV-I 感染者の追跡調査研究を行っており、HTLV-I 感染予防や ATL 発症予防等に関し、詳細な意見交換を行うことができた。特に、母乳の健康全般に対する有用性を考慮に入れると、短期母乳哺育は HTLV-I 感染リスクの軽減に最も有効な手段であることで合意した。

また、Mueller 教授は国際疫学共同研究を行う際には、データの整理を行うために相手先の言語が理解できるスタッフが自国内にも必要であることを強調した。これは、私達が行っている中国との共同研究でも、栄養調査や調査票の内容を確認する際に感じていることであり、国際共同研究の組織を構築する上で重要な点である。

分子疫学研究に関しては、Hunter 教授らに私達の中国での研究結果を紹介し、意見交換を行った。今後の分子疫学研究の戦術として、遺伝子多型とがんリスクとの関連をスクリーニング的に検索する手法も試しているが、生物学的活性が明らかにされている多型に焦点をしばり環境宿主相互作用を検索する方法が中心であることを確認した。そのためにも、ターゲットとする遺伝子に関する多型の情報だけでなく、生物学的機能や活性の情報を十分検討した上で作業仮説を立て、研究を

行うことが重要である。

今回の訪問では、受入研究者の周知なスケジュールの調整のもと、受入研究者だけでなく、受入機関の他の研究者にも暖かく迎えられ、十分な意見交換と情報収集を行うことができた。多くの研究者と討論した中で最も印象的であったことは、研究には明確な作業仮説が重要であることが改めて実感できたことである。最後に、このような機会を与えてくださった関係諸氏の皆様、受入先の先生方に改めて深謝いたします。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

### 平成 14 年度日本がん疫学研究会幹事会 議事録要旨

日時：2002年7月15日(月)12:00～13:00

場所：熊本市国際交流会館 4階第2会議室

出席者：岸、津金、祖父江、岡本、永田、菊地、  
徳留、田島、浜島、黒石、渡辺、森本、  
竹下、大島、津熊、味木、石川、清水、  
古野、吉村、秋葉(21名)

欠席者：森、辻、坪野、深尾、稲葉、簗輪、山口、  
山本、清水、玉腰、中村、中地

#### 【議事録要旨】

1. 庶務報告(庶務担当幹事：浜島)
  - 1) 会員数：2002年7月1日の時点で会員数は254人、海外顧問3人、賛助会員1人である、1990年から会員数はほぼ一定である。
  - 2) 第24回研究会の記録集は発行されない。
  - 3) NEWS CASTの発行：主編集者竹下幹事、副編集者古野幹事により、No66からNo69の4号が発刊された。
  - 4) 会計報告：平成13年度の会計収支報告が行われ、徳留幹事からの監査報告後、承認された。また、平成13年度の実績に名簿作成費用が追加された平成14年度の予算案が承認された。
2. 役員等の一部改選(代表幹事：田島)
  - 1) 代表幹事の交代：田島代表幹事の任期終了により、徳留幹事が代表幹事として幹事会にて選出された。
  - 2) 特別会員の推薦：大島幹事、黒石幹事が特別会員として幹事会で推薦され、総会で承認された。

3) 幹事の改選：今年度は13人の幹事が任期満了となった。特別会員となった1名を除く12人の幹事と本荘哲、田中恵太郎、浜島ちさと会員が新幹事として幹事会で推薦され、総会にて承認された。

4) 監事の改選：任期を満了した徳留監事に代わり、永田幹事が任命された。

5) NEWS CAST 編集者：竹下幹事の任期(2年)が終了し、新編集者として祖父江幹事が推薦され承認された。

3. 次々年度の日本がん疫学研究会の会長選出(代表幹事：田島)

次々年度の研究会(平成16年度、第27回)の会長として、津金幹事が推薦され承認された(なお、同時期に開催予定の日本がん予防研究会の会長は国立がんセンターの津田先生が推薦されている)。

4. 次年度の日本がん疫学研究会の開催(次期会長：岸)

第26回日本がん疫学研究会は第10回日本がん予防研究会(北海道大学細川真澄世話人)と合同で、平成15年6月23日(月)午後～25日(水)に開催するとの説明があった。

5. その他(代表幹事：田島)

昨年度に見送られた名簿作成を今年度に行うことになった。E-mailアドレスは個々の会員の希望に沿って掲載することになった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

### 第3回岐阜シンポジウム・日本癌学会 シンポジウム「がん予防—そのメカニ ズムと実践」

日時：2002年11月5日(火)13:30～6日(水)12:40

会場：長良川国際会議場(岐阜市)

プログラム：

第1日

第1部：がん予防の分子メカニズム

(座長) 黒木登志夫、山崎 洋

(演者) 武藤 誠(京都大学)

園田俊郎(鹿児島大学)

鎌滝哲也(北海道大学)

梶村春彦(浜松医科大学)

第2部：がんの chemoprevention

(座長) 北川知行、森 秀樹

(演者) 大澤俊彦 (名古屋大学)  
西川秋佳 (国立医薬品食品衛生研)  
津田洋幸 (国立がんセンター)  
柴田敏之 (岐阜大学)

第2日

第3部：感染に伴う発がんの予防

(座長) 前田 浩、田島和雄

(演者) 日野茂男 (鳥取大学)  
浅香正博 (北海道大学)  
小俣政男 (東京大学)  
森脇久隆 (岐阜大学)

第4部：がん予防の実際

(座長) 富永祐民、垣添忠生

(演者) 大島 明 (大阪府立成人病センター)  
古野純典 (九州大学)  
坪野吉孝 (東北大学)  
森山紀之 (国立がんセンター)

世話人：黒木登志夫、森 秀樹、清水弘之  
問合せ先：岐阜大学医学部疫学・予防医学分野  
(旧公衆衛生学教室) (永田宛)

Tel: 058-267-2247 Fax: 058-265-9020

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

日本学術振興会日米がん研究開発事業  
セミナー「移民とがん」

日時：2002年11月6日(火)午後～8日(水)午前  
会場：長良川国際会議場 (岐阜市)

講演予定者：笹月健彦(特別講演)、津熊秀明、兜 真

東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記東西編集後記

第70号から祖父江友孝先生(国立がんセンター研究所がん情報研究部)と古野純典(九州大学・予防医学)がNEWS CASTの編集を担当することになりました。この2年間編集を担当していただいた竹下達也先生が和歌山県立医科大学の教授に就任されました。あらたな地でのがん疫学情報を早速紹介されています。益々のご活躍を祈念します。7月に熊本市で開催されました研究会において徳留信寛先生が代表幹事に選出されました。がん疫学研究会のあらたな展開を期待するところであります。田島和雄

徳、白石泰三、古野純典、津金昌一郎、高橋 隆、野口眞三郎、清水弘之、永田知里、Laurence Kolonel, Loic Le Marchant, Lynne Wilkens, Gertraud Maskarinec, Atsuko Shibata, Anna Wu, Yoon Ahn, Graham Giles

世話人：Laurence Kolonel, Hawaii University,  
清水弘之 岐阜大学

セミクローズドですが、ご希望の方はご参加下さい。  
問合せ先：岐阜大学医学部疫学・予防医学分野  
(旧公衆衛生学教室) (永田宛)

Tel: 058-267-2247 Fax: 058-265-9020

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第13回日本疫学会学術総会 案内

学会長：古野純典

日時：2003年1月24～25日

会場：福岡市・明治生命ホール

主題：「臨床研究と疫学」

抄録締め切り：2002年10月15日必着

関連行事

疫学セミナー「疫学・統計の基本と実践」

日時：2003年1月23日13:00～17:30

場所：九州大学医学部コラボセンター

申し込み締め切り：2002年12月13日(先着200名)

問い合わせ先

第13回日本疫学会学術総会事務局

九州大学大学院医学研究院予防医学分野

TEL (092) 642-6113 FAX (092) 642-6115

e-mail: premed@phealth.med.kyushu-u.ac.jp

先生はがん疫学研究者が持つべき理念を述べておられます。医学研究の中核を担う疫学には高い見識が必要であることにまったく同感であります。嶽崎先生は米国研究者との交流活動を報告されています。海外研究者との交流は自己研鑽の大切な糧であることを改めて認識しました。10月6～8日にはAPOCPの第1回会議が名古屋で開催されます。アジア・太平洋地域のがん研究者との交流を深めることも日本人にとって重要でしょう。(古野純典)

発行

日本がん疫学研究会

事務局

〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿1-1

愛知県がんセンター研究所疫学・予防部 気付

TEL: 052-762-6111 (内線7316) FAX: 052-763-5233

振込口座 00810-2-37001

編集責任者

古野純典

祖父江友孝